特40
619

客歳の晩夏猫々道人魯翁曽て茆と房總二州に曳き暑を鉛山の霊場に避るの日偶然一樵夫より聴得し此物語りに其趣意克く勸懲の道に悉ひ且近世の一奇談なるりのうへ魯翁遂に帰京の後壬石異聞の名と設けて伊呂波紙上に号と嗣ぎ陸續登録せられも八十回の長きに至り其稿未だ全くねど猶看客の冒采に愈高く響しとり書肆の主個勸文堂なりと小冊稗史にのせんと屢魯翁に請ふ折うへ魯翁机邊の繁劇餘力即ち弁生にあれと托して操觚しめし初編の一帙素来本記の抜萃にて毫も愚意を交へざれば標題も其儘一字を換へ壬石異訓と斯い号けつ

明治十五年十二月

岡丈紀識

居山刀上

浜山刃止
捕縛されたる
綾部的藏の
せ村役の
ら賭子
場を分
て等

浜山刃止
凶器を奪ひ
抵抗

鋸山玉石異訓初編巻上

東京　猫々道人原稿

岡　犬紀操觚

○第一回

抑安房の國平郡保田の郷元名村なる鋸山の神亀元年行基菩薩の草創なる人漬道を開きー以降幾ほ一千二百餘年連峯峩々として鋸の歯を逆たるが如く奇たりに似ふ巨岩あまたと擬へてその山名を稱号す又此

鋸山玉石異訓初編巻上

東京

猫々道人原稿

岡　犬紀操觚

○第一回

抑安房の國平郡保田の郷元名村なる鋸山の神亀元年行基菩薩の草創なる人漬道を開きー仏陀堂より一千二百餘年連峯裁ことして鋸の嵩を送たるよ弩第たり波の里俗おとを擬へてその山名を稱号す又此

山の巖石に自然佛像の形象となる事恰も人造の巧をなるに異ならねど真實に奇異の霊嶽なりと云安永年中日本禪寺の僧侶當山帰依の信者に勧めて石像の羅漢数体を寄附せしむるに安政のたゞ今まで經歴九十餘年間九て山中の岩窟の中に安置したる佛像の負数い一千二百餘体に到れど数年を經て石像の欠損なるを新規石匠に造刻し再建する者多き中に上総の國茂原上所の石匠

天城民義と云る者その生國い伊豆の正法寺の石工の一男にて幼年時より父に習ひ一業を修日蓮山嶮嶽の危険事業に棚せーゞその年齢二十一二の頃繩に繋ぐ縄の編紙刻むに等しき活業の最悲哀と覺えるより迫屬父母も世を去て同胞にても少く兄の心中安ーと僅少の地所紙幾戚に対死ち世の知己を優りて上総の義兵に給料来まど渠者疫に共地と云り絶國に行しときく事ども今い知付く

活計の方便なれば石鑿の業たる業りて那首遠
首と名間取り成索をうち尚所の石匠萩弟吉七が
大石塔の、史員よその職工と需むるう木煙宿の金
個が活しと問くと答しく訪ね訪ね情徳と身の
上の所用あたを憑きつ是より與七が弟よ雇い是旦
養職業の間帳みも鹿廚と操られ扱きと助け第
弟よ心と用ゆるよその妻お勝の乳よ悔ひ交負業業
の果たる後もお勝が推拳よりよく首尾よく弟子同

撲よ仕へしも逸一年と過ぎるよ主個與七ハ氏義
が最老実なる心中よ感ド一膚の精力と憑みける
然るよ與七の先妻よ玉吉とらふ一遺児なり年齢又
歳の時その妻身扱り後の妻と迎ふるよ継子あり
てい支帰中の睦しうね基ひなれば一先が是然
里児よ出もそそ家事の和熟可ろんめれと他人
の勧めよ玉吉と同国富津の浦を為る漁師の娘
よ里児よ出しも後お勝と迎へ娶り後妻となさ

るに即ち安政五年の春にして當時與七八三十六歳
か勝に二十五歳なりしとぞ抑此お勝といへるはその仮
名江戸新橋金六町（四名里俗云ふ彩色といふ）にて三絃の師匠世と
渡る藝妓業の娘者なりしが多額振ふ産業出
もその用くのかけ流し定めし孫たる嘉の中に上総
屋の網元にして武蔵屋幸義といへる者は是は
の割烹樓にて古度鶴にてなるよかの幸藏が挙動上
総弾りの徒接ぶなど衣服の裝飾懐中物まで仍

渉りたる贅沢好き經費の美金も平生の家に優りて
遣ひしうべ傾き易き性ひ女の深たる思ひよ偏引
水いるみもやらで打解しその疾と初め墨田も遠
出遊山と揚屋に心中の実と知りつかお勝に是
伝老母ふも去ての後の活計今は幸義が出身中に
毎月歳千欲雑費を出して お勝が作と寄宿と定
め爾来江戸に出る度ごに必ず此家に止宿りしが
お勝に好き幸義の助接に有りて活計のうち自

修業の藝技稼ぎよ思慮なき酒席に強て縛り誘る
変さへ多くるよかの事務が出府中へ他の家の聘ぎ
よ後ぞ務多自由の見識よ気儘のか務と俸号
も高く一年俸りと過ぎうち老母も近寄身敬りく
愚とと為べき親属もなれべか務へ一國よ事
務と自己が所支と思ひ結め今へ藝技の業業も為
雪く寧そ上総の果ゆもの世界と故郷よ連れて糸
操漁りの業ありとも為慣しの後へ今ゝ如き変へなるま

しきよと事務よ屢に解き通るゆそ結ゝべ藝技の
営業と慶め此住居と賣掛ひて上総へ移ひ移べれ
ど我家よ本妻なれべ其近色よ別家ど造りを処よ
和女と住いまべしと相談変よ整ひて安政二年の十
月初旬終よ居別し住所と離是懇意の方へもそれ
ぐよ告別して小網町なる本更淵河岸より乗船
よ赤込を上総の地方よ出帆せしが順風船合さへ最
よくてその翌朝未更淵の渡場よ船の着くや居事

夢いかが物と遠ざち陸より上りて町より出で或旅籠屋より
出ぜ一憩ひて朝飯の支度を整へて此処より二挺
の駕籠と雇ひ中の一挺へ用品の品
を乗せ乗る頃浦の侍への立場茶屋より早速駕
息杖を休めて汗を拭ふぞ幸彦が物も駕籠と
たち出で苦しく暑き腰うち敷け綿華薫らも
分の衣裳掛掛めく婦女の通連い尋常の支婦の
旅あるぞ江戸風俗い風姿う義妹脱りとえうけ出

酒代を徑るい舁夫の附目と個ゲ偷眼と視り行う
互ひよ身とに私語合ふて幸彦の産色より一個ゲ小腰
と屈めモシ旦那本更津うの通し駕籠二挺で僅
一両の夫賃使い定得宏の旅店へたてる営業の義
理賃服ざけいは池袋の豚徳よしくも一個糸金一
分でい女房や狭児のはゲ糊されぬ行卒個へ一
分ゲ酒代をお頼をまをしまとりふ尾よ屠く
ぬうの之個も苦しく辛とさ一添く一ッ処へ寄競

長我部
幸藏
幸藏
妾
お勝

幸藏茶店を
舁夫の強迫を
怒つて四人を
懲らむ

とべ幸蔵殿への使ひよ煙管の火皿と搬と打ちコ
壮丈流旅宿うう定めさ駕籠と途中で極る汚代
と同ド亜泥い酷い拐頼自己も上総ゲ生国で高賣用
の江戸通ひよ年中往来ふ此街道駕籠の外汚
代と出まい云ぎと此方も知ってゐるが義理ったら
と生方うう言と切られさ側ーへ人仮令婦人と連
やうゲ逃人と怖ゲる亡命や相孔ゑ者の結でへ人
先と急ゲ夜日又里の路程此處うう下て歩行ても大

手へ移人ゲ其代り此場の始末を本更庫の旅宿人厳く
疑ぐく尋ると駕籠よ入まる荷物と紅出ー再び宗
旨ひけたひたるそ舁丈芸へ多勢と憑ふ衆に
よ罵詈て男女を中よ分る取巻元堂肇おうみの接
藉よ幸蔵最ちや堪へうね然たる床机と衝と立
上り煙管の雁首ふて一個の舁丈の肩間を殴と
撲付れば吁と叫びく頻と歴へ退く背後ようう三個
ゲ同業の仇光えて為よと各自息杖を振あげ

二、三、之を打ちたり苗時幸義思ふやう敵を八を強き舁夫の四個は味方八味一個殊は婦人の足を纏ひ尋常なれハ汚ぐる難しと腰は帯たる洞環造の刀中刀とまらりと引抜き驍ふて打込む息杖の中心弦両断は切落し除る及頭が一個の舁夫の肩は源りて為傷と負ハまは云甲斐もなく舁夫共ハ流る鮮血は驚き慌忙駕籠うち棄て我先と足とをりは遁亡るを此打か為ハ柔居の老猟と共は避たる林の蔭

は身を戰慄して居たりしが斯と見るより急度り先幸義が恙なき身と祝して居るやう彼奴等多くの党と集へて今仇報は来るも忘れ難べ疾く此処を退きて堅嶮の難を避けも人とお為が動めは幸義も愛は道理と心中は歎頭やがて歳千秋懐中より柔代を出して老猟は與へ自ら衣裳を脱はうち怒け是より幸義お為の二個ハ是を早めて漸と半里隔り の道程と山を村を辿辿く初迄の家を訪ふ打しも

最弟逋亡なる舁夫共へ金員を給し一個の再び得物を求め引搦げ男女の跡を追来りて高家の門に立ち誇り痴傷を負ひたる同業の者の仇の旅人方へ出よと罵り騒動を生じ個の図付け奥の方へ立出るゝ今幸蔵とお勝の二個を捕縛する者を見べ唯睥睨し打視やりて戸外へ駆出し舁夫共がその狼籍を止んとまるを一個いかゝ孫く知己の者と思し く声をかけ推うと思へば床更津の仁左衛門の頻相

変へ同業を集へて自己が家の来客を堂摩とな りかけるとは如何しく理由なる為若して結せば悪くい扱 うなねと云是て仁左衛門巻の手賦として背後 なる二個の同業よりも對ひ勘次も喜助も朱ど 知らぬ此お人い安房上総より名も高い賭博者の 親分株金蔵の爲め弟と云へ方寧弟を適宜 やうまか委任まをが此方も僥倖な孫でいまい ろと互ひに顔頭情その始末い箇換くと駕籠賃

酒代を出さぬ喧嘩募りて旅人が一個の同業
重右の肩先へ疵傷を負せ丈より弟へ此動次い眉
間を煙管で撲破られ是この通り血塗れの遺恨の
仇を報さんと跡を慕ひ〳〵南家が親分の住居へ参
さう〳〵ぬ狼藉い宮免の人と仁左弟なども二個も
居しくうち御辭ろよ急ぎ弟い事細成ぬ重右と
やちが疵傷い元より動次が怪我の療治料も喧ガを
べく兼備ぶれば仁左弟は迷惑い微塵背戻うけ

ぬ〳〵此村外れの安旅宿屋で暫時待て呉れと遺
金谷の一云よそんろう親分頼ミ外と初めの勝ひ物
変へやら消て三個の舞丈ハ居しくうち連れ村外
是ある茶屋の旅泊るぞ都元くる

○第二回

當時主個の島ヌ弟ハ舞丈芸ガ立去し跡者送りて
幸義とお物の二個を奥間へ迎へ分と思しる者よ
吟味業を勧め點心を出して饗応ぶ一別以来の

に須を演べさて貴兄の婦人を連て何要ようの亜
ぐぞと問ひて幸義莞爾と笑ひ隙て湯たる紛紜う
兄弟分の厄介よりて今更大人気あた我まの稚恵へ
面目なれど舅丈芸ゲ婦女連と偏蔑まゲての強
迫ゲ癖よ薄うて双物三昧仮令安宿の者みもの足
渠等よ疵傷を負せーうえい利を兆よ踊を身の過
ちその業用い徴干でも適冒ゲ奥へて内緒を軽
むとりみよ意外弟も要細を水猪との縛の為差まで

いえどうーくも我夫の寓舎よ逗留ゲ是と止めく二
個のふ分と引連をかの舅丈等ゲ宿り居る楽屋を
さーく出ゲー跡よお徐い意外弟の留守と喪ひ幸義
ゲ勝の為りよさー寄みるゲ〳〵声と激ゲて問ひ居る
やう今没めて関でいみるれど且恥い上総の綱元と
水新ー身の上と宮子の変つさ場の仕様とその
主個い衰達家のよい新設と素せーみその新設
ゲ兄弟分ゲ且恥とさーてらえうい若茂黄弟もか

同業の府書のなるか方でハなゝざりしうと星を
指たるか務ゞ稼よ幸彩ハ冷笑ひして徐ろて亜一
附する烟草と一口吸ひて才、能祭しゝ咽の舌の上綱
元様ハ親父の代上総生れの活動も強児の時より務
負務演色の物の穴布ゝ陸の高の小丁家親父の
金成盗出し市場博奕の盃蓙ゝ野田務負ゞ舌の張
り逆まハ親の勘当受け考陸口りや上物の長依長の
伐布拓布緒の革紐で小野係濃越後色とかし口り

命と脱と切ゝ危險堅嘩も此方の業術左ゝ右
ゝ人みも解られ故郷ゝ近き長我部の里ゝ帰りく
上総一國博奕の場所の賭徳ゝ長我部の章義と
高ゝ分て安房小総考陸色でもゝ一ハ解られゝ表
意道家の生揚り海の色情ゝ恐縮まて別深を生
れゝ暁ゞ一所ゝ連てと紅屋ゝ江戸と掛つゝ上総
沼今まで震つゝ賭業の化の皮ゞ露顕てハ定め一
竟想ゞ考さらり然一果神ゝ横色ゝ一連海ハ情ゝ

異りへれへと云まてお勝へ新しき縄やり一端出つ
さ二個ゞ中後令鬼でも蛇へおろう貴郎ゆゑう
めゆやりゆ若艱ゆ厭ゆ妻ゞ心中ゆ幸綱結と思
つくおくれと荒爾笑ゆ幸義へその了留ゆう布
妻へ離縁ゆ之ゆ看棄へせゆと密と猶ゆ行しゆれ
ゆ家のゆ個ゆ為ゆ布へゆ分共俱ゆ為ゆ之ゆ幸義
ゆ絡るゆう先刻ゆ旅宿ゆ行せゆ亜ゆかの仁ゆ郎ゆ
要綱と渡ト童ゆ動次の二個ゞ疫獲の業用ゆ為ゆ金

ゆ爾を渠ゆゆ與へて内海の書面ゆ爪印押せたりと
取出ゆ之ゆ一札と幸義へ見ゆりて為ゆ布ゆその
中義ゆ之ゆ数をゆゞらひゆ立換の金員を返却ゆ分
ゆゆ土産ゆりゆ歳平欲の黄白を與へつゆ欲へ
此家ゆ止宿ゆ個と酒肴換一盃出立ゆさんと
ゆる為ゆ布へ之より布ゆ二挺の駕籠を懸へゆ
幸義ゆ勝ゆ勧めゆ布らしゆ分の者ゆ一里腹りの
道と送らせ別ゆ為ゆ個へ長我新より二里

島五郎口論の中裁を取来る証書を幸蔵に見せる
島五郎
おうつ

幸蔵

程陽ちゝ伊丹田と人る片山里なる幸義が子分猪突の権六が宿より出家よりお勢と南方乗花け其外一先長我於の我家より戻りて留守中の仏狩の用事を足まちよ聖十一月八同国彩浜の十疫市るて此打ハ上総小総両国の老若男女群集なゝ殊より近郷笠喪なる観世青の境内まで来給人ハ引もきゝ雑沓大方なゝざゝしゝなべこと天嘉居の除物商人而せくまで張垂び覗き機関観物小

原泥塗連発文殺小所傷或ひハ傳侯居合技人の服と接く掏摸勇職蛋の内より大樹の蔭小山の禁より盆踊と市役けたる野田博奕樗蒲一切とべ丁半あり悪業仲居ハ群と分ちく賦元壺振之者ハ市鯖の革鞋長服美猴務者や乱暴人と盛き獲術の防だと知ゝ是飯水澣傳の梁山泊より矢剛地怒の喜傑が俠ふも打やと想像せり此一殺の盆踊より寺ハと号け丁半の勝負と競ふ相方が賭たる金額の二十一の分

を元立て函に収め合して表紙得る者へ則ち長
我部の幸蔵なるが一肥年の十疫のとり仮物を
宿の銭を弟として一所不住の悪漢が手紙を上掛
連れて尚新場の市に来り鎌元幸蔵に金を借ん
と強て迫りて賭博場を乱物せしうべ幸蔵が子分
一同寄集ひ彼銭を弟を切殺し於下の取名を追追
ぞけしが此事平くも願を実えその罪幸蔵一己
に帰し虚くと故郷に立うべ忽ち捕へらるんと推し

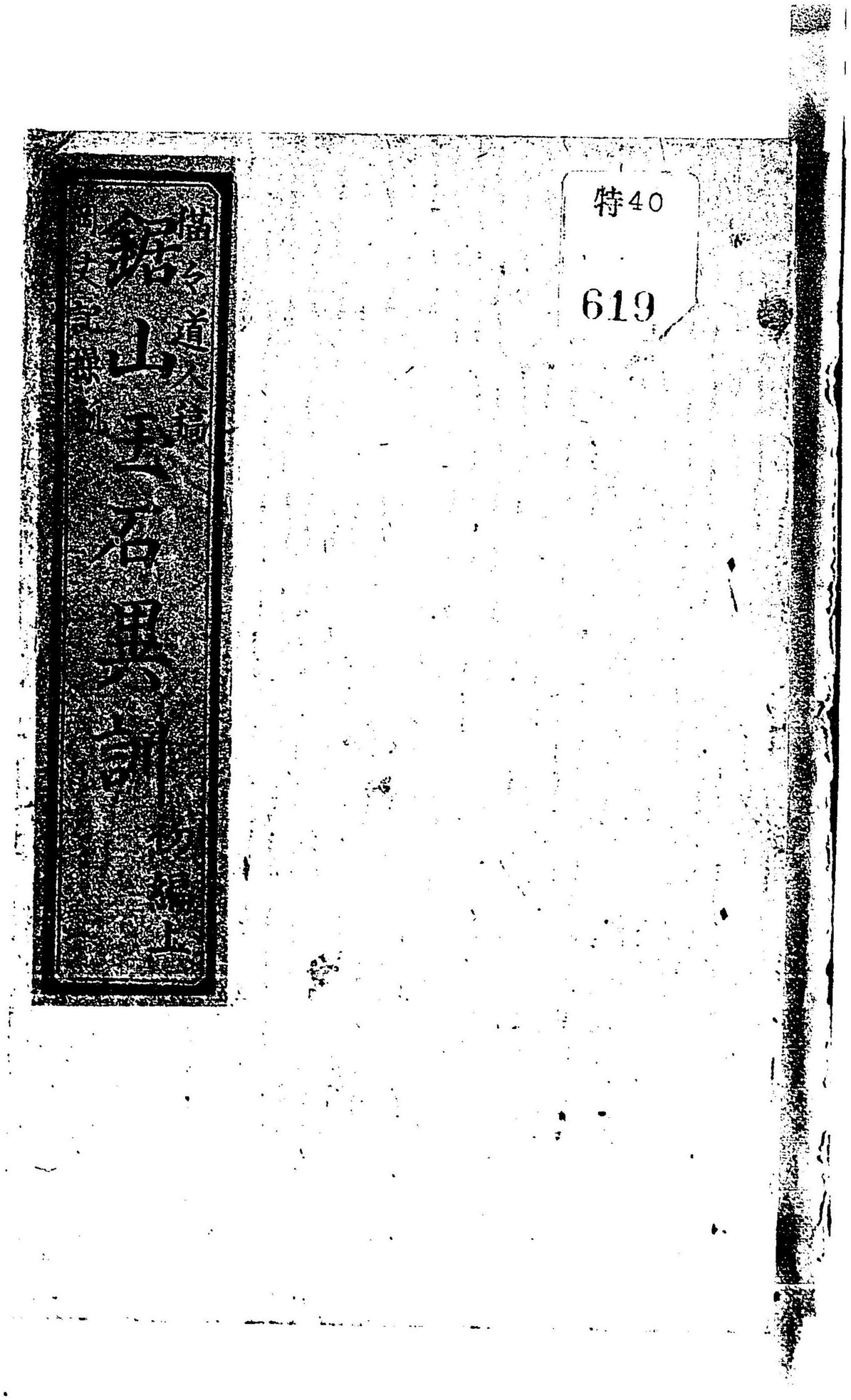
暫時江戸に潜伏居て二年余りを過しつ最も乱
の高し頃と尚年の十疫の賭場と月船に故郷に
帰り来りしへ其身の果と知られたり然べ又幸蔵
も我出地なるが法度を破る賭博の場所を家族
懐ひに大刀ぶり込を一の子分猫実の権六初め数名
の久次一の宮の次郎吉なども何れも名のなる長級
者と拓殖よぶり裂羽織大小佩たる武士打扮へ尚
時江戸神田かまが池に真影流の撃剣師千葉周作

げ、二男同苗同之亟亂友とう名ゝ赤しめ威ーゝ連ー
擬ひ者と雲妻お揚げ々を〻連且かの新婦の十兵ゝ
来り我賦元の賜場を巡りて金莖毎ゝ眼と配り
北者と防ぐ他への掃揮の最いうめしたれしもなれ
一叢義る喪羅ゝ喧囂〻と共く声喚哉と撞六
久次ゝ帝者ゝ個菁しく其場とさして色汚くち院の
肖後ゝも再び元人の叫ぶ声ハ他ゝ喧囂の記しるらん
と幸義ハ関之亟ゝお揚と付託と彩ら其処ゝ汚んと

ある林の蔭ゝ数多の捕丁たや幸義げ茶後ととり米
上意くと呼ばるゝるぞさてハ茶料の米を乞げ炊りて我と
捕結るの汁異るゝ去るゝ通る丈ハ通れてえん
と左右ゝ組付く捕丁と身と揺〻して突退潜退け腰
の一刀抜ゝ疾く水車のごく打揮る夫陸電光石火
の疾業ゝ竹らひうゑて捕丁げ右ゝ一爾蹟ふ手ゝ
一方の血路と開元米丁張う一筋の小路となりぎ義妨
途中機関の罠ゝ行逆潜込と思いぞ撞と例ゝ伏ー記ん

とまると雖も左右の敵五六人の捕丁の
伏場忽ち手足より跳り出打重りて幸蔵とぐるく
束縛つて為たる刀を拾ひ元鞘に収めて囚人引立元の市場
より引返さんと此時幸蔵が子分なる桂吉久次郎幸吉の三個
も疾く捕縛せ今幸蔵の捕へまて同じまどろに入へと
縋やり互ひに面と見合して生きの眼血だらのこ赤
怪物もなうりの空

鋸山玉石異訓初編巻上終



特40
619

091228-001-3

特40-619

鎗山玉石異訓　初編

猫々道人／著

上

M16
DBN-2078